1981年度春季研究発表会

大会参加ルポ

感想と提案

去る3月12，13日の両日にわたり大阪府立大学で開催された春季研究発表会に参加した．例年の学会参加と同様に，数理計画法の発表会場を中心に関連する他会場の発表を，個人的な興味のおもむくまま摘み食いする形で見聞してきた．

個々の研究発表で印象に強く残ったものを2つほど紹介しよう．1つは初日の特別会場の最終発表となった埼玉大の刀根氏の「物流と計画技法」で，みずから関係した牛乳の集配システムの例を引きながら，物流問題への数理計画的なアプローチの考え方を平易に解説された．日常数理計画法にあまり接することの少ない人々にもなじめて，教育効果の高い発表であったことと思われる．数理計画屋の私にとっては，物流・ネットワーク関係の分野は数理計画問題の宝庫であるとの意見に大いに勇気づけられた次第である．ただ発表時間の制限のため，準備された貴重な資料が十分発表されなかったことは残念で，この種の特別テーマに関しては発表時間の制限について再考する余地があると思われた．

2つ目の発表は，慶応大の柳井氏による医薬品の薬価基準の決定メカニズムを数理モデルで説明しようとするものであった．タイトルの目新しさに引かれ面白半分に参加したにもかかわらず，氏一流の説明のうまさと迫力にいつしか話に引き込まれていた．毎回似たような話ばかり聞かされ，いささか食傷気味の発表が多い中で異色の印象に残った発表であった．

大会全体に対しては，とにかく府立大関係者の献身的な努力が強く印象に残った．ペーパー・フェアも発表ブースがホールと廊下に設けられ，参加者が自由にあちこち覗けるという本来のペーパー・フェアの主旨に沿った形式で行なわれ，多くの参加者を引きつける結果となった．ただ，研究部会報告がペーパー・フェアのかなりの部分を占め，しかも部会の開催経過を羅列しただけという発表形態は毎度のことながらいただけない．この種の部会報告を義務的に行なわせる必要はないと思うのだが（過去においてそのようなつまらない発表をした1人として）．

最後に大会運営に関して日頃感じていることを述べ，いくつかの提案をしたい．

- 研究発表を特別発表と自由発表の2つに分ける．特別発表は特別テーマ関係やある種のレフェリー制度を通過した研究にかぎり，精選されたレベルの高い内容のものとする．
- 特別発表関係は1会場だけで行ない，現在の講演スタイルの発表形式を踏襲し，発表時間も現在の倍程度に増やす．自由発表は内容を制限しないが，すべてペーパー・フェア形式とし，随時質問や対話ができるようにする．
- ペーパー・フェア形式の発表では，少なくとも1日2回以上(午前と午後とか)同じ発表を繰り返すことを義務づけ，プログラム上発表時間の重複のためある発表が聞けなかったということがおこらないようにする．
- ペーパー・フェア会場は広いホールのような場所を類似のテーマごとに確保し，各会場の中心に喫茶コーナーを設け，休憩室を兼ねた溜り場的な性格のものとする．

こうすると，現在のような退屈で説明不十分な研究発表（多くは学生による卒論や修論レベルの発表で，まるで大会が研究発表の練習場の感がある）でウンザリさせられることが減り，会員の参加意欲も大いに湧くと思うのだが．

（鈴木久敏）

信頼性会場から

OR学会への参加は今回でまだ2度目である．3月13日（2日目）は信頼性の会場を中心に講演を拝聴した．まず全体的に感じられたことは，他学会に比べて堅苦しさがなくなりリラックスした雰囲気の中で研究発表ならびに質疑応答が行なわれているということである．この

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

ようなムードなので若い研究者も積極的に発表を行なえると思われる．この日の最初の発表は東京理科大の日下氏によるもので，従来所与とされていた設備規模を信頼性・保全性を考慮しながら決定するという問題を非線形計画法を用いて論じられた．信頼性会場の中心テーマは，さまざまな条件下におけるシステムの信頼性解析と最適保全方式に関するものであった．複雑なモデルをとりあつかう場合は，システムの信頼性の尺度としてどのような評価尺度を用いるかが問題となる．このような問題に関する広島大の中村氏らの発表はたいへん興味深かった．保全方式に関する発表では minimal repair を考慮に入れたモデルが多かったのも1つの特徴であろう．このような問題では，考えているモデルの妥当性・現実性が問われるわけで，専門外の者にもわかるような具体的な例をあげて説明してほしいという感じをもった．実際に，モデルの意味に関する質問もいくつかなされていた．また自分として印象の深かったのは大阪大の大鋳氏らによる多状態コヒーレントシステムに関する発表であった．この発表は第4報であり，これまでは多状態コヒーレントシステムの寿命分布に関するいくつかの closure theorem について述べてこられたが，今回はそのような理論の展開で有効な道具となる hazard transform について論じられた．最後になったが，15:20～16:00 のペーパー・フェアでは各研究部会の部会報告を中心に活発な議論が交されたことをつけ加えたい．

（宮川雅巳）

いま一歩の感あり

初日の午後の特別講演会も盛況であった．発表者は某大手スーパーの物流部長で，業界の実情，永年の体験談等わかりやすい話を聞くことができた．

そのあとは一般発表とペーパー・フェアが続き，各人興味のある会場をわたりあるいたのであるが，個人的な感想を言わせてもらえば必ずしも理解しやすい発表ばかりではなかった．これはもちろん聞く側の知識不足が最大の理由であり，日頃の不勉強をたなに上げて，やれわかりやすさだの応用性だのと発表分野によってはないものねだりにすぎないのであろうが，出張旅費をもらって聞きにくる身にとってうしろめたさを感じなくても済む程度にわかせてくれる（あるいはわかった気にさせてくれる）発表がもっと多くほしかった．

難解な発表を聞きつつ考えてみたが，聞く側にとって魅力ある研究発表会の条件としては，①発表のテクニック（棒よみではダメ），②時間割の組み方（「数理計画」，「信頼性」といった従来のわけ方だけではなく「理論家向き」，「応用一点張り」のような基準を導入する），③座長の態度（質問が出ないときは皆のわかってなさそうなところを自分から聞いてやる）などが重要であろう．この日たまたま聞いた範囲では，座長の態度だけがまずまずで，それ以外の面はいま一歩という感じがした．

（全田寛）

お詫び　春季研究発表会は多数参加者を数え盛大に催され，会員各位にお礼申し上げます．なお，見学会申込者多数のところ申込み先着順に定員で勝手ながら打ち切らせていただきました．ここにお礼かたがた，お詫び申し上げます．（春季研究発表会実行委員会）

編集後記　本号特集は研究部会「創造性開発の数学モデルとＣＢＤ」による企画です．創造することはだれにとっても夢であり，生きがいであるものの創造することがいかに大変なことか身をもって感じています．本号の特集「創造への接近」によってもそのアプローチがなお一層大変なものだと感じられましたがいかがでしょうか．

▶さて，5月で当ＯＲ誌編集委員会の高橋体制がスタートしてちょうど2年経つこととなります．5月15日の総会を待って次期の小林竜一先生を委員長とする体制にバトンタッチできることとなり，スペースシャトルのようなパーフェクト・タッチ・ダウンを目ざして引き継ぎの準備に入っているところです．（M）

オペレーションズ・リサーチ

昭和56年5月号　第26巻（新シリーズ第6巻）5号　通巻245号
代表者　松田武彦
発行所　社団法人　日本オペレーションズ・リサーチ学会
東京都文京区弥生2—4—16　学会センタービル
（電話　03-815-3351～2）〒113
編集人　高橋磐郎
発売所　株式会社　日科技連出版社
東京都渋谷区千駄ケ谷5—4—2　〒151

本誌のご注文は直接
日本オペレーションズ・リサーチ学会へ　定価　850円（郵送料含）年間予約購読料 9600円（郵送料含）
本誌への広告お申し込みは明報社（571-2548），日経弘報社（563-2241）へ

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．